



「せめて公害道路をドーム化に」

うめかも 吹田市民大集会

市長に推進派が当選
しかし大気汚染が心配

「07年4月の市長選挙で、推進派の現職が当選し、梅田貨物駅が吹田に移転されることになった。公害道路ができるのは、もう仕方がない。しかし大気汚染が心配だ。ドーム化を求める署名を集めて、吹田市長とJRに要望し、局面を打開していきたい」。藤井幸雄泉町1丁目自治会長が決意を表明。さらに、「JRの幹部と相談していたら、『市長がドーム化してほしい』と要望すれば、それは考慮せざるを得ない、と表明した。市が住民の要望を取り入れてくれるかが、カギだ」と、ドーム化は決して実現不可能な要望ではない、と展望を示した。

大阪・中津から学び 道路計画をトンネル方式に

記念講演は、「大阪・中津コーポ高速道路に反対する会」の室哲夫さん。「公害道路」は阪神高速淀川左岸線のこと。「自宅前に高速道路ができるという計画を聞いたのは、マンションの人居説明会で、鍵を手

渡された時。「窓から見える淀川の眺望は最高ですよ」という説明の後、「実はそこに6車線の高速道路ができる」と言うのですからね。1971年、万博直後のことだった。以後、室さんたちは「高速道路に反対する会」を結成、なんとこの運動は36年間も続く。

阪神高速公団とはいえ、相手は国でしょ？粘り強く闘う中で、絶対反対から「道路に蓋をかける」という運動に変わって行きました。保守的な地域で、「ピラなんか配ったことがない」といわれる地元を説得して、市民運動を繰り広げました。

長年の闘いで、高速道路計画はトンネル方式に改善された。「黙っていてもダメです。公害道路はアカンという声を上げ、改善を勝ち取りました。吹田でもドーム化は可能だと思います」。

十三・高槻線に2万台 JR公害道路とダブルパンチ

会場からは「十三高槻線が開通したら約2万台の車が通る。JRの公害道路とあわせてダブルパンチだ。公害道路をドーム化する要望は、十三高槻線にと



粘り強い闘いで、阪神高速淀川左岸線はふたかけ方式に変更された
(中津付近のイメージ図)

っても死活問題」「ドーム化という改善策を聞いて、これは実現させてほしい切実な要望だと思った。などの発言が相次いだ。

東京では住民の声を受け入れて、道路をシエルターで囲って、公害の原因となる物質を取り除き、クリーンなガスを排出するシステムが実現している。東京でできていることを大阪でできないはずがない。吹田市やJRが本場に住民の健康を考えているのかどうか問われている。

1972年、沖縄で発売された「十九の春」のレコード化にかかわった備瀬善勝は、元歌について、「ジュリグアー小唄ではないか」と推測する。



「民謡を歌わせた」そうだ。ジュリグアー小唄は戦前からあったというが、生粋の沖縄の歌かというところ、どうもそうでもない。なまそうなのだ。備瀬は「主さん」という言葉は沖縄にはない」と指摘する。

ジュリグアーとは、沖縄の言葉で遊郭のことだ。備瀬によると、戦時中は沖縄民謡を歌う風潮がなく、三線を弾くのはジュリ(娼婦)しかいなかったという。「遊郭で三線弾いて、将校さんにウチナ

のレコードに歌を吹き込んだ民謡歌手の本竹祐助は、古里の与那国島で「十九の春」のタイトルで歌われていたという。その本竹も、沖縄で生まれた歌ではないという点で、備瀬と意見が一致する。「ヤマトグチ(本土の言葉)で歌うのは嫌だった。三線に乗せにくかったから、三線のできた歌じゃない。間違いない手拍子で歌われていた。おそらくヤマトンチュウが落としていったんじゃないか」と話す。



「三線を奏でるナビィさん」

話を整理すると、「十九の春」に近いメロディーは戦前から沖縄にあったが、

「十九の春」の物語(中)



英国ロイヤル・オペラ ビゼー/歌劇「カルメン」より
©ジェネオンエンタテインメント(株)

そのルーツは本土からもたらされ、人口に膾炙するうちに歌詞を変えていった——ということか。民謡が時を経て歌詞を変えていくのは、ごく普通のことだろう。

ここで急に、舞台は大阪・天六に移る。奄美料理の店「ていだ」では、夜ごと、三線の音色が響く。弾き手は、鹿児島・与論島出身の店員さん、愛称ナビィさんだ。彼は「十九の春」のルーツを、「与論小唄」だと言った。

「ソテツ地獄」から脱するため、島民は集団で福岡の三池炭坑に移住する。厳しい労働と差別にあえぐ日々。島民は「与論小唄」を歌い、望郷の念を募らせたのだらう。

「与論小唄」の原曲は「与論ラツパ節」とされる。日露戦争のころ、全国で流行した「ラツパ節」をアレンジしたものだ。メロディーは「十九の春」とまったく違うが、「一銭五厘の葉書さえ千里万里を便りする 同じ与論に住みながら 会えぬ心のせつなさよ」と、「十九の春」と共通する歌詞がある。

こうした新しく作られた民謡が与論島に持ち帰られ、歌い継がれていった、とナビィさんは考えている。

「もつとルーツをさかのぼるとですね。彼は意味ありげに笑って、「オペラの「カルメン」なんですよ」と言葉を継ぐ。思いがけない曲名が出てきたもんだ。なんでも、「ラツパ節」の原曲は陸軍音楽隊教師のフランス人、シャルル・ルルーが作曲した「抜刀隊」という曲で、ルルーは当時上演されていた「カルメン」の中の曲をまねて作ったのだとか。ここまで来ると、もはや「十九の春」のメロディーはどこにも見いだせない。(敬称略、つづく)